

羅振玉舊藏『新定書儀鏡』斷片の綴合

山口正晃

はじめに

敦煌文獻を取り巻く環境は近年激變し、嘗ては圖版が見られなかったもの、あるいは目録すら見られなかったものが、容易に目睹できるようになった。その結果、各方面において研究が格段に深化している。敦煌文獻はその大半が斷片であるため、斷片どうしを綴合して原狀を復元するという作業もまた研究者の大きな關心を集めてきたが、この方面においてもまた目覺ましい成果が挙げられている。

本稿では、羅振玉舊藏の『新定書儀鏡』斷片を中心として、これと接續する斷片が近年の情報公開によって數點確認されたため、これらをあわせて綴合し、原狀の復元案を示してみたい。

一、各斷片の概觀

本稿で扱うのは、杜友晉『新定書儀鏡』の斷片である。この寫本は總計 12 種確認されているが〔山本 2012〕〔山本 2013〕、同一寫本と認められているのは散 0676（20 點の斷片）、上圖 18、ZSD076、羽 569 の 4 種である〔山本 2013〕。これらの中、散 0676 の斷片がほぼ接續することは既に『書儀研究』で指摘され¹、また、上圖 18 が羽 569-2 と接合することは山本氏にすでに言及がある²が、いずれも具體的な復元案は示されていない。

¹369 頁に「(辛)《貞松堂西陲祕籍叢殘》中の書儀斷片、《敦煌遺書總目索引》著錄爲散 0676 號；屬杜氏《書儀鏡》的殘頁共有二十一片、羅氏沒有按順序排列、參照伯 3637 (甲卷)・伯 3849 (乙卷)、可以把這二十一殘片大致拼合。」とある。筆者は 20 點の斷片が接合すると考えているが、趙氏は 21 點と數える。趙氏は具體的な復元案を示していないので、どのように數えて 21 點となったのかは不明である。

²〔山本 2012〕〔山本 2013〕には同一寫本と述べるだけで接合のことは記されていないが、山本氏は清華・京都 2011 年聯合漢學工作坊主催「文學・宗教・藝術與物質文化」(臺灣・國立清華大學、2011 年 11 月 24 日)での口頭報告「杏雨書屋藏幾件書札研讀札記」において、この兩寫本が接合することを指摘している。

散 0676 というのは、『總目索引』の「四、敦煌遺書散錄」の中、「8、羅振玉藏敦煌卷子目錄（依貞松堂藏西陲祕籍叢殘）」に散 0676 として記載される「書儀殘葉 書儀斷片」であり、『祕籍叢殘』に圖版が掲載されている（以下、本稿では貞松堂本と呼ぶ）。全部で 20 點の斷片が同一寫本である。ちなみにこれらの中 3 點のみ、現在は中國歷史博物館に所藏されていることが判明している（歷博 52-2、歷博 52-3、歷博 53）が、他は現在の所藏先は分かっていない。

ところで『祕籍叢殘』には寫本番號が特に附されていないため、20 點の斷片の一つ一つを指示する何かしらの基準をいま便宜的につける必要がある。今、『祕籍叢殘』の内容を見るうえで最も簡便なのは恐らく影印復刻版として出版された『敦煌石室遺書百廿種』（『敦煌叢刊初集』第 6～8 冊、新文豐出版公司、1985 年。『祕籍叢殘』は第 7 冊所收）であろう。これに基づいて以下、本稿で便宜的に使用する番號を決めておきたい。基本的に一頁につき上下 2 點の圖版が掲載されているので、各頁の上、下の順に番號を振ってゆく。まず、383 頁では 3 點の圖版があるが右側の 1 點は関係ないため除外して、左側の上段を①、下段を②とする。以下、384 頁の上段が③、下段が④、というようにして順次番號を振ってゆき、389 頁の上段が⑬、下段が⑭、となる。そして 390 頁には 4 點の圖版が載せられるが、上段の右を⑮、左を⑯、下段の右を⑰、左を⑱とする。最後に 391 頁には上段に一點、下段に二點の圖版を載せるが、下段の左側は本稿での検討対象外であるため、上段を⑲、下段の右側を⑳とし、これで計 20 點の斷片を指示することとする。

貞松堂本以外についても概略説明しておく、上圖は言うまでもなく上海圖書館のもの（以下、上圖本と略稱）、ZSD は中國書店所藏のもの（以下、中國書店本と略稱）である。いずれも近年になって初めて情報が公開され、その存在が確認されたものであり³、入手経路や來歴については一切不明である。

最後に羽 569（以下、羽田本と略稱）は、これも近年になって情報が公開された大阪の武田科學振興財團杏雨書屋所藏敦煌祕笈のコレクションで、2010 年に大阪で開かれた第 54 回杏雨書屋特別展示會でも出展され、このとき配布された圖錄にも掲載されているが、それによれば清野謙次の舊藏品であり、寸法は縦 14cm と記す。本斷片では文章そのものは天地ともに缺いていないにも関わらず、縦の寸法が通常の寫本よりかなり小さいのは、後に記すように、三段に段組みした寫本の一段分であるからに他ならない。またこの羽 569 というのは二點の小斷片を掛軸仕立てにしたものであるが、上段は『現在賢劫千佛名經』という佛名經の斷片であり、下段に配される書儀斷片が本稿で取り扱うものである。ちなみに羽 570 も

³上圖本は『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』（上海古籍出版社、1999 年）で、また中國書店本は『中國書店藏敦煌文獻』（中國書店、2007 年）でそれぞれ圖版が公開された。

同じく2點の斷片を一幅の掛軸に装丁したもので、上には印沙佛が、下には『大乘法苑義林章』が配されるが、羽569と羽570の兩幅の掛軸は對になるものである。清野謙次舊藏書については高田時雄氏による論考がある〔高田2006〕。そこでは清野が羽田に譲渡する際の日録が紹介されており、展覽會の圖録でも指摘するように、この日録の中の「敦煌小斷片四種二軸」とされているものが羽569・羽570に当たると考えられる。つまり、羽田の手に渡る前の段階で、掛軸に装丁されていたということである。

本寫本の復元案を作成するうえで参考にしたのは『書儀研究』である。『書儀研究』では Pelliot chinois (=以下、P.ch. と略稱) 3637 を底本として他の各寫本をも参照し、『新定書儀鏡』全文の録文が示されている。ここで挙げた斷片群が該当するのは本録文の336～356頁のおおよそ20頁分である。この該当部分は末尾の數行を除いて上下二段に分けられ、下段はさらに二段に分割される。言い換えると、全體として三段の段組みで構成されるが、均等な割り付けではなく、上段が他の二段に比して最も高く、中・下段がほぼ同等でなお且つ上段に比して低めに設定される。ただし末尾數行のみ、段抜きで書かれる。本稿末尾で示した復元案でも同様の體裁が取られており、これが『新定書儀鏡』に概ね共通する體裁であったことが分かる。尚、上記したように貞松堂本については『書儀研究』において既におおよそ綴合できることが指摘されているが、具體的にどのような位置關係で接續するのかは示されていない。ここで「位置關係」として注意したいのは、上下の位置關係、すなわち上段・中段・下段の位置關係である。各段における前後關係は、録文に従えば自ずと判明するが、上段・中段・下段相互の位置關係は寫本によってずれる蓋然性が極めて高い。従って、『書儀研究』の録文のみに基づいて上下の位置關係を一律に決めることは出来ない。本稿で復元案を示す意義は、一つにはこうした上・中・下段の位置關係も含めて綴合状況を具體的に示すこと、いま一つは貞松堂本のみならず、近年の情報公開によって新たに指摘された3種の寫本をも併せてそこに示すこと、ということになる。

二、復元案の作成

各斷片の内容を、『書儀研究』の録文に照らして該当する箇所を示したのが【『新定書儀鏡』斷片と『書儀研究』の對應表】である。上述したように、復元に當って最も重要になるのが、上段・中段・下段の位置關係である。この點、一覽表を見れば分かるように、上段と中段、もしくは中段と下段のように二段にまたがる斷片が

いくつかあるため、大いに参考になる⁴。特に、中段と下段にまたがるものには上圖本・貞松堂本の②・③・⑩・⑪・⑬・⑮など比較的多くあり、従って中段と下段の位置関係はほぼ確定できると言ってよい。これに對して、上段と中段にまたがるものは貞松堂本の①と⑦の2點のみであり、確定させることが難しい。ただし、末尾の段抜きで書かれている箇所に着目すると、貞松堂本の④と⑯がそれぞれ、上段と末尾および下段と末尾にまたがっているため、ここと貞松堂本の①⑮を兩端として確定させると、その中間部分についてはかなりの確實性をもって復元することが出来る。裏を返すと、そこより前の部分、具體的には上段でいえば羽569および貞松堂本の⑳、中・下段でいえば上圖本および貞松堂本の⑬に該當する部分については、上段と中・下段の位置関係は一定の留保をつけなければならない⁵。

【『新定書儀鏡』斷片と『書儀研究』の對應表】

寫本番號	《敦煌寫本書儀研究》	貞松堂⑧	下段／ 349 頁 4 行～350 頁 9 行
羽 569	上段／ 336 頁 5 行～338 頁 10 行	貞松堂⑨	上段／ 350 頁 1 行～352 頁 3 行
上圖 18	中段／ 336 頁 10 行～338 頁 4 行 下段／ 336 頁 11 行～337 頁 8 行	貞松堂⑩	中段／ 345 頁 2 行 下段／ 343 頁 3 行～344 頁 8 行
ZSD076	上段／ 347 頁 9 行～348 頁 12 行	貞松堂⑪	中段／ 353 頁 7 行～354 頁 13 行 下段／ 351 頁 1 行～352 頁 4 行
貞松堂①	上段／ 340 頁 12 行～342 頁 6 行 目 中段／ 342 頁 2 行	貞松堂⑫	中段／ 350 頁 6 行～352 頁 9 行
貞松堂②	中段／ 347 頁 6 行～348 頁 2 行 下段／ 345 頁 4 行（有錯誤）～ 347 頁 2 行	貞松堂⑬	中段／ 339 頁 2 行～341 頁 9 行 下段／ 338 頁 13 行～340 頁 8 行
貞松堂③	中段／ 345 頁 6 行～346 頁 13 行 下段／ 344 頁 9 行～346 頁（有 錯誤）	貞松堂⑭	中段／ 345 頁 4 行～347 頁 1 行
貞松堂④	上段／ 352 頁 4 行～356 頁 1 行 末尾／ 356 頁 1 行	貞松堂⑮	中段／ 341 頁 10 行～342 頁 8 行 下段／ 340 頁 10 行～341 頁 6 行
貞松堂⑤	上段／ 345 頁 6 行～347 頁 8 行	貞松堂⑯	中段／ 348 頁 10 行～350 頁 5 行
貞松堂⑥	下段／ 347 頁 3 行～349 頁 3 行	貞松堂⑰	中段／ 344 頁 5 行～345 頁 3 行
貞松堂⑦	上段／ 342 頁 7 行～345 頁 4 行 中段／ 343 頁 7 行～343 頁 11 行	貞松堂⑱	下段／ 352 頁 5 行～354 頁 2 行 末尾／ 356 頁 3 行～356 頁 12 行
		貞松堂⑳	上段／ 340 頁 3 行～340 頁 11 行

こうして復元したのが、本稿末尾の復元案である。見開き左側の頁に上段を、右側の頁に中・下段を掲載し、寫本の全體像を把握しやすいよう配慮した。文字については基本的に『書儀研究』の録文に依りつつ、それほど多くはないが文字の異

⁴この表を見れば、『書儀研究』の録文と、本稿で取り上げる斷片群とでは、上下の位置関係の一致しない場合があることは明白である。

⁵たとえば、羽 569 の圖版を確認すると、13 行目「姪生亡弔弟妹兄姉書」の下に、文字の殘畫らしきものが極く僅か見える。筆者はこれを、復元案の中段 14 行目行頭の「告」の字ではないかと考えるが、そうすると復元案ではおよそ 2 行分ほどではあるが、ズレがあることになる。

同がある場合には特に注記することなく改めてある⁶。尚、重複記號については文字として起こす（例えば「悲"痛"」→「悲痛悲痛」）のが通例であるが、本稿では出来るだけ字數と行の長さを忠實に再現するため、半角記號の「"」を使用した。また改行について、確認できない箇所については大體前後の改行字數を参考とした。さらに行數について言えば、概ね、上段の方が中・下段に比して文字が大きく行間もやや廣めであるため、兩者の行數は一致しない。中段と下段はほぼ文字の大きさ・行間ともに同じであるが、いかんせん寫本であるために行數が完全に一致するわけではない。こうした問題については適宜、空白行を挿入して對處した。こうして上段は空白行を含めて總計 131 行、中・下段は同じく空白行を含めて總計 150 行となっている。さらにその後、末尾の段抜き部分が 8 行分ある。この部分は當然、見開き左右の頁で行數は對應しており、文章もつながっている。また印刷レイアウトの都合上、一枚の斷片が頁をまたぐ場合があるが、その場合は矢印を附して示した。

三、餘話

さて、こうして復元案を作成してみて疑問に思うのが、なぜ、この寫本は 20 點以上にもおよぶ斷片として現在に傳わっているのか、ということである。考えられるのは、もともと斷片という形で藏經洞に封入された、言い換えると 20 世紀になって發見される前から既に斷片となっていた場合と、いま一つ、發見された後、何者かの手によって切斷された場合と、この二つの中どちらかしかない。言うまでもなく藏經洞發見の敦煌文獻の大半は斷片であり、前者の可能性も無いわけではない。しかしその場合、同一寫本の斷片がこれだけの數でまとまって残されていたという事例を他に聞いたことはなく、その點でやや不自然な印象を免れない。やはり、後者の可能性が極めて高いと言ってよいだろう。ここではこの點について若干の考察を加えたい。

まず單純に外形的特徴から指摘すると、復元案を一覽すれば明らかなように、こ

⁶ただし 1 點のみ、大きな異同があるためここに注記しておく。『書儀研究』下段の、345 頁 10 行目から 346 頁 3 行目まで、「夫亡舅姑夫及父母答弔辭」という題のつけられた本文について、甲本（＝ P.ch.3637）は闕くため乙本（＝ P.ch.3849）と丙本（＝ P.ch.5035）によって補った、という注記がある。斷片群の中でこの箇所に該當するのは貞松堂本の②と③であるが、一覽表にも記したように、やはり混亂が見られる。具體的には、趙氏が乙本と丙本によって補ったとする部分の最初の四字「禍不出圖」は本斷片（貞松堂本③）も同じであるが、その後は、實は直前の「妯娌父母亡及夫亡辭」の内容を繰り返している。復元案の行數で示せば、下段の 75～81 行目が問題の箇所であり、この部分が、直前の 66～72 行目と全く同じ内容になっており、『書儀研究』の甲本・乙本・丙本のいずれとも異なっている。

これらの断片群は上下は各段毎に切断され、左右は文例のちょうど区切れの箇所
で切断されているものが多い⁷。とすると、誰かが意圖的に切断した可能性が高い
ということになる。さらに言えば、切断面が極めて直線的であるものも少なくない。
つまり、この多くの断片群は決して自然に破断したのではなく、誰かが何等かの
意圖をもって切断したものとみて、まず間違いない。

では、いつ、誰が、どのような目的で切断したのか。假にこれを、9～10 世紀
の人が切断したとする。その目的として考えられるのは、一つは補修用紙として
再利用するために切断したということ。しかしそうであれば、内容の区切りを踏
まえて切断する必要は全くない。では、文例集の必要な箇所だけを携帯用に切り
取ったのか。しかし、本断片群は確かに上述したように内容の区切りに従って切
断されている傾向が顕著に認められるが、但し、そうっていない断片もままあ
る⁸。そもそも文例集はあらゆる事例を網羅して初めて「文例集」として機能する
のであって、切り取ってしまえばもはやその価値はない。こうした点を勘案する
と、やはり當時の人が切断した可能性は限りなく低いように思われる。

これに對して、現代において誰かが切断したとすると、どのように考えられる
か。切断してバラ賣りすることによって小錢を稼ごうとした可能性が充分考えら
れるであろう。その場合、文字列が全く意味をなさない断片よりも、内容として
一定の意味を読み取れるものの方が、當然より高い値がつけられるであろう。何
等かのルートでこの寫本を入手した人物は、なんとかより多く稼ぐために、この
寫本が三段組の構成となっていることに着目して、ある程度の意味内容のまと
まりを保った状態で切断するということを思いついたのではなかろうか。たとえば、
羅振玉自身が次のような言葉を残している。

明年（＝宣統2年〔1910〕；筆者注）、由署甘督毛公遣員某運送京師。既抵春
明、江西李君與某同鄉乃先截留於其寓齋、以三日夕之力、邀其友劉君・
婿何君及揚州方君、拔其尤者一二百卷、而以其餘歸部。…（中略）…方
君則選唐經生書迹之佳者、時時截取數十行鬻諸市。故予篋中所儲、方
所售外、無有也⁹。

これは、藏經洞に残っていた敦煌文獻を北京に移送する際、李盛鐸をはじめとし
て劉廷深・何彦昇・方爾謙らが結託して優品を横領したという、惡名高き行爲につ

⁷特に上段の断片にその傾向が顕著であることは一覽表を見れば分かることなので、紙幅の都合
もあり、繁雜を避けるためここでは一々指摘しない。

⁸特に中・下段部分。これも一覽表を見れば分かることであり、一々指摘しない。

⁹羅振玉『後丁戌稿』所収「姚秦寫本僧肇維摩詰經殘卷校記〔序〕」（『羅振玉學術論著集』第十
集下、上海古籍出版社、2010 年）

いて述べた部分であるが、注目したいのは中略の後である。「方君（＝方爾謙）は則ち唐の經生の書迹の佳なる者を選び、時時に數十行を截り取りて諸を市に鬻ぐ。故に予の篋中に儲^{たくわ}うる所、方の售る所の外は、有る無きなり」と、方爾謙がまさしくそのような行爲を行っていたことを述べている。あるいはまた、

三年前、予曾從友人借觀是卷、令兒子福葆寫影。今乃得之市估手、初以後半二十八行乞售、亟購得之。復求前半、乃復得之浹旬以後。然末行尚有新割裂之迹、知尚有存者、今不知在何許、安得異日更爲延津之合耶。爰書以俟之。壬戌九月¹⁰。

とも述べ、三年前（1919年）に「友人」（誰を指すのかは不明）から借りて見たことのある『老子義』殘卷が、「壬戌」の歳（1922）に賣りに出されていたので購入したが、前半・後半・末尾に三分割され、結局末尾は手に入れることが出来なかったことが記されている。このように、かなり早い段階から敦煌文獻を「切り賣り」することが横行していたのは明らかであり、本斷片群もそうした文脈で捉えて大過ないのではないか。

ちなみにいま引用した中の前者では、羅振玉は當初、方爾謙がこうして切り賣りしたものしか所藏していなかった、とも述べられている。つまり羅振玉はそれらを購入していたわけである。「經生の書迹」という表現を素直に解釋すれば寫經を指すと考えられるが、果たして寫經だけだったのか。現在、羅振玉が最も早く1910年に入手したと考えられている敦煌寫本は、『春秋後語秦語』殘卷と『太公家經』、それに『大雲夢想經』である〔林1988：2〕。いま問題にしている書儀もここに含まれるかどうか、斷定はもちろん出来ないが、その可能性も考慮に入れておいてよいだろう。

羅振玉は自分で購入したり、あるいは知人から借りたりして目にした敦煌文獻について多くの跋文を書いており、購入したものについてはいつ、どこで購入したかが書かれていることがある。そうした情報に基づいて〔林1988：2-3〕は、羅振玉が敦煌文獻を入手した時期として1910、1913、1922、1924年の四つを挙げる。残念ながら、この書儀斷片について羅振玉は一切文章を残していないので實際のところは不明であるが、恐らくこの書儀斷片も、この四つの時期のどこかで入手した蓋然性が高い。

いずれにせよ、本稿で取り上げた23點の斷片は、その出所は一つで、現代人の手によって切斷されたと考えるのが最も自然である。特に、羅振玉が20點もの斷

¹⁰ 羅振玉『松翁近稿』所収「老子義殘卷跋」（『羅振玉學術論著集』第十集上、上海古籍出版社、2010年）

片をまとまった形で所蔵していたのは、別々に手に入れたとするよりも一括して入手したと考えるべきである。そして、他に三點の斷片が三つの機關によって所蔵されていることから考えると、これら斷片が文字通り「切り賣り」されていたときに、敦煌文獻の流失に心を痛め、私財を擲って蒐集に努めていた羅振玉がそれを知り、賣れ残っていたものを全て一括して買い取ったことが考えられる。あるいは、羅振玉が「全部」買い取ったと思っただけで、實は「賣主」はまだ數點隠し持っていて、後から小出しに賣ったのだろうか。

上述したように、上圖本と中國書店本の來歴は一切不明であるが、羽田本については清野謙次舊藏であることが分かっている。〔高田 2006〕によれば、1939 年作成の讓渡目録と、そのちょうど十年前、1929 年刊の『昭和法寶目録』に記載される清野コレクションの内容¹¹とで所藏點數が倍以上に増えている。そして羽 569・570 を指すと考えられる「敦煌小斷片四種二軸」は『昭和法寶目録』には記載されていない。ということは、これは 1929 年から 1939 年までの十年の間に新たに清野コレクションに加えられたものということになる。ここで、羽 569・570 が羽田に讓渡された時點で既に掛軸に裝丁されていたことに注目したい。清野自身、自分の所藏する敦煌寫本を切り取って掛軸に裝丁して知人に贈っていたことが〔岩本 2013〕で指摘されている。従って清野が入手した後、羽田に讓渡する前に裝丁した可能性もある。ただ、たとえば書道博物館藏の中村不折舊藏本に含まれる王樹枏舊藏本のように、中國において裝丁されたものが日本に流入した例も決して珍しくはない。しかも、『敦煌祕笈』に掲載される圖版で確認すると、羽 569・570 の裝丁は、清野舊藏の他のもの¹²と明らかに異なる。清野が入手した時點で既に裝丁されていた可能性が高いように思う。とすると、清野の入手時期（1929～39 年）ともあわせて考えると、最初の「賣主」（＝恐らく羅振玉が一括購入した人物）の手から清野に渡る間に、少なくとも一人の手は經由していた、その人物によって裝丁されていたことになる。こうした裝丁に着目して分析すれば、そのあたりの事情があるいはもう少し分かるかも知れないが、紙幅の都合もあり、本稿ではそこまで明らかにし得ない。

以上、本斷片群の流傳について若干の考察を加えたが、多くは根據の薄弱な推測に過ぎない。ただ、これらの出所が一つであったとすると、たとえば羽田本と貞松堂本²⁰の間のように、本來はあったと考えられる斷片がいまだ見つからない。近年の情報公開の波の中で、こうした散逸してしまった斷片が更に發見されること、また貞松堂本も多くは行方不明のままであり、その現在の所藏先が判

¹¹『總目索引』の「敦煌遺書散錄」にもこの目録情報は転載されている。

¹²敦煌祕笈中に含まれる清野舊藏品については〔岩本 2010〕〔高田 2006〕参照。

明することを願ってやまない。

引用文献（略称）一覧

- 『書儀研究』 趙和平『敦煌寫本書儀研究』（新文豐出版公司、1993年）
『總目索引』 商務印書館編『敦煌遺書總目索引』（商務印書館、1962年）
『敦煌祕笈』 『敦煌祕笈・影片冊』第7冊（武田科學振興財團、2012年）
『祕籍叢殘』 羅振玉『貞松堂藏西陲祕籍叢殘』（上虞羅氏印、1939年）

【論考・中文】

- 林 1988 林平和『羅振玉敦煌學析論』（文史哲出版社、1988年）
周 2010 周常林「羅振玉與學部藏敦煌文獻」（『敦煌學輯刊』2010年第4期）

【論考・日文】

- 岩本 2010 岩本篤志「杏雨書屋藏『敦煌祕笈』概観」『西北出土文獻研究』第8號、2010年
岩本 2013 岩本篤志「大東急記念文庫藏敦煌文獻來歴小考」『立正史學』第114號、2013年
高田 2006 高田時雄「清野謙次蒐集敦煌寫經の行方」『漢字と文化』9號、2006年
山本 2012 山本孝子「書儀の普及と利用——内外族書儀と家書の關係を中心に」『敦煌寫本研究年報』第6號、2012年
山本 2013 山本孝子「敦煌吉凶書儀の言語に反映される社會環境」（京都大學學位申請論文、2013年12月提出）

（作者は大手前大學総合文化學部准教授）

『新定書儀鏡』斷片群復元案

(上段)

001 弟妹亡弔次弟妹書
002 不意凶衰汝 兄傾逝割裂拔氣與汝同懷
003 痛深春寒悲念何極此 耶孃萬福男女無
004 恙吾如常因人還遣此不慘愴不次大哥告某 月日
005 大哥書至某所付某省 封
006 答書 凶璽無常
007 次哥傾逝分裂拔氣貫割難任悲"痛"奈"何"
008 次哥年未居高冀保榮祿何圖忽嬰疾疹遭
009 此凶禍悲"痛"深"孟春猶寒伏惟
010 羽 569 次哥尊體動止康愈未由拜洩倍增悲戀謹附
011 疏慰慘愴不次某再拜 月日
012 題如吉書與兄書
013 姪生亡弔弟妹兄姊書
014 月日名頓首禍不出圖 某夭逝聞問傷悼貫
015 割難勝悲深 某乙盛年冀其成立何圖積善
016 無應奄遭此禍伏惟割裂慈愛痛"切"奈"何"孟
017 春猶寒伏惟次姊尊體動止萬福未由拜洩伏
018 增悲戀謹奉疏慰慘愴不次某再拜 月日
019 謹 謹 上 次姊座前 某狀 封
020 答書 不意凶衰
021 某夭逝分裂慈愛難以爲懷痛"深"某乙盛年
022 冀紹堂構忽焉夭歿悲慟無從春寒悲念何極
023 未即集洩但增悲哽遣此慘愴不次次姊告
024 題如前 月日
025 父母弔子三殤書
026 不意凶衰 某乙夭逝悲痛貫割難以爲懷念汝輩
027 遭此凶衰悲痛何極某乙年雖幼稚冀其成
028 奄從物化痛割如懷奈"何"未即見汝但增悲念
029 遣書慘愴不次耶孃告

(中段)

(下段)

三日小斂祭		001
維年月朔日孤子 _子 等敢昭	上圖 18	002
告于 亡考之靈某等不孝罪	弔後至祥禫已來經	003
深無狀罪深荼毒如昨奄及小	節辭	004
斂觸目貫割不勝屠楚敢	日月流速奄及祥制 _{時云頻遷}	005
少牢之奠伏惟 尚饗	_{時序云奄經冬至冬節} 孝感罔極攀	006
	慕號擗哀痛奈何哀	007
七日大斂祭	苦奈何 答云	008
維年月朔日孤子名等敢昭告于		009
亡考妣之靈某等不孝罪深禮制	日月迅速荼毒如昨奄及	010
隨沒日月流速奄及大斂敢薦少	經祥制 _{除禫至布經禮制} 攀慕無及觸	011
牢之奠伏惟 尚饗	目崩潰不自死滅苟延視	012
堂上啓柩將葬祭	息酷"罰"罪"苦"	013
維年月朔日孤子名等敢昭	弔伯叔兄姊亡辭	014
告于 亡考妣之靈某等罪	凶故無常	015
逆深重禮制隨沒龜兆告	賢叔傾逝貫割哀苦悲	016
吉將付玄宮敢薦少牢之奠	痛奈何	017
伏惟 尚饗	答云 凶故無常家叔	018
輜車出祭	傾逝悲"痛"罪"苦"	019
維年月朔日孤子名等敢昭	舅姨亡弔母辭	020
告于 亡考妣之靈某等不孝	凶豐無常 某舅傾逝	021
罪深重禮制隨沒日月流速奄	割號楚悲"痛"奈"	022
及祖載輜車既駕將即玄宮	何" (13)	023
敢薦少牢之奠伏惟 尚饗	答云不意凶哀汝舅	024
下柩祭	女婿亡弔親家翁母辭	025
維年月朔日孤子名等敢昭	不意凶變 某郎殞逝割	026
告于 亡考妣之靈某等不孝	裂慈愛悲痛奈何	027
罪深禮制隨沒今以吉辰將就玄	不圖凶衰 某盛年殞逝次娘	028
宮謹薦少牢之奠伏惟 尚饗	不造忽爾孀居撫視孤	029
	遺悲悼痛苦	030

030

題如吉

月日

031

(20)

答書

032

月日名言禍出不圖 某乙夭逝悲痛貫割不可

033

勝任伏惟悲念奈何傷悼奈何季秋漸冷伏惟

034

耶孃尊體動止萬福即此某無橫未由 侍奉

035

伏增悲戀謹奉白疏慘愴不次再拜

036

彼此重服相與書

037

春寒不審氣力何似某乙悲豐可量有事任于此下論未由拜洩

038

倍增崩潰遣書荒塞不次孤子姓名頓首

039

(1)

姓次郎 服前 月日

040

罪逆深重不自死滅辱書倍增喪禮唯命早皈故府

041

爲要春寒惟 動履友祐未即被洩但增悲仰餘准前

042

重服內尋常相與書

043

春寒惟 動息友祐某荒豐可量辱書兼

044

致嘉記倍增悲悚因人還荒不次孤子姓名頓首

045

次郎 服前 月日

046

047

外族 弔答書一十二首

048

姑姨姊妹夫亡弔姑姨姊妹書

049

月日名言凶豐無恒 姑夫妹夫云不意凶某郎殞逝

050

傾逝聞問悲慟不能已已惟妹夫云念汝攀慕擗標

051

何可堪居哀"痛"奈"何"妹夫妹夫云某郎素無疾

052

疹冀保終吉何圖積善無伏違此凶哀悲痛奈

053

何孟秋猶熱伏惟妹夫云秋涼念汝無橫此吾如常未即集洩但增悲望遣書不次々哥告某娘

054

次姑動止友豫即此某蒙恩未由拜洩伏增悲

055

戀謹奉疏慰慘愴不次某再拜 題如內族兇書

056

(7)

弔女婿遭父母喪書

057

月日名句凶豐無常 親家翁母傾逝奄棄榮

058

養聞問驚惻悲慟難勝想攀慕號擗荼毒

059

貫割哀"苦"奈"何"親家翁母年雖居高冀延眉

060

壽何圖奄遭凶豐丁酷罰哀苦奈何初伏毒熱

臨壙祭	↓	嫂亡弔父母及兄辭	031
維年月朔日孤子名等敢昭告		凶故無常 嫂傾逝 ^{弟婦}	032
于 亡考之靈某等不孝罪深不		云新婦伏惟悲悼傷切悲"	033
自死滅將即幽壙尅用今日辰號		痛"奈"何"	034
天叩地不勝哀苦謹薦少牢之奠		答云 不意凶故汝嫂殞	035
伏惟 尚饗		逝男女偏露益增悲痛	036
			037
延神祭		妻亡弔丈人丈母辭	15 038
維年月日孤子名等敢昭告于		禍出不圖次娘子傾逝悲	039
亡考妣之靈某等不孝深重禮制隨		慟貫割哀痛奈何	040
沒謹奉神柩已即玄宮攀慕慈	→	答云 不意凶故次娘夭逝	041
顏不勝號絕謹奉靈柩還延謹		重疊相鍾撫視相對偏露	042
薦少牢之奠伏惟 尚饗		滿室何以爲懷痛"深"	043
春祭		女亡弔答女婿辭	044
維年月朔日孤子名等敢		不意凶衰次娘子殞逝貫	045
昭告于亡考之靈某等不		割悲楚痛"深"	046
孝罪深不能隨歿奄及春		當家薄福凶疊相鍾某盛	047
節不勝攀號敢薦甘新		年忽然夭逝撫視偏露痛"深"	048
伏惟 尚饗		新婦亡弔親家翁母辭	049
夏祭		凶故無常	050
維年朔日孤子名等敢昭告	→	新婦殞逝悲悼傷切哀苦	051
于 亡考之靈某等不孝		奈何	052
罪深不能滅亡玄象遄流奄及		答云不意凶衰盛年殞	053
夏節攀慕慈顏		逝男女偏露痛"深"	054
號天叩地不勝號絕敢			055
薦新醪伏惟		婦人弔辭八首 ^{內外及相識同}	056
尚饗	17		057
秋祭		婦人弔婦人夫亡辭	10 058
維年月朔日孤子某等敢昭		凶疊無常	059
告于 亡考之靈某等不		某郎傾逝惟追慕擗	060
孝罪逆不勝口死亡日月		標荼毒貫楚哀痛奈何	061
遄流奄及秋節攀慕慈		答云	062
顏不勝貫割謹薦秋物伏		某郎盛年謂保終吉何	063
惟 尚饗		圖奄此凶疊男女孤遺	064
		追慕無及觸目殞絕酷	065
		罰罪苦	066



061 想 某郎所履友立男女等友致某諸弊少理
062 未由造慰但增悲望謹遣疏慰慘愴不次姓名句
063 謹通 某郎至孝凶前 郡姓名白弔 封長封
064 答書取四海重喪書

065

066

067

068

069 弔女遭夫喪書
070 不意凶故 某郎殞逝聞之悲悼難以爲懷念汝
071 荼毒哀痛奈何 某郎年未居高謂保終吉
072 何期不祐遭此凶哀念汝孀居男女姑露撫視
073 相對哀痛奈何時寒念汝友立男女等友致
074 未由集洩但多悲念遣此慘愴不次耶孀告某
075 耶孀<sup>有號
任稱</sup>白書至某所付某娘省 封
076 答書 罪璽深重
077 某郎傾逝荼毒貫割痛深痛深某郎忽
078 嬰疾疹冀漸瘳損何圖不祐奄鍾此
079 禍追慕無及觸目號絕罪"苦"深"仲春
080 已暄伏惟 耶孀尊體起居萬福未由
081 訴奉某月日告伏增悲戀謹奉白書荒

082 寒不次次娘再拜

083 ZSD076 題如前 月日

084 新婦亡弔親家翁母書<sup>答同女
稱亦
然注中
改訖</sup>

085 禍出不圖 新婦夭喪<sup>答云次
娘夭逝</sup>悲悼痛楚

086 不能自勝惟割裂慈愛去離骨穴哀"痛"

087 奈"何"<sup>如答即于惟下
云哀念苦痛</sup>新婦盛年冀典中饋

088 <sup>答云次
年冀保侍執</sup>何圖不造奄遭凶哀偏露

089 滿房難爲撫視惟哀念奈何春寒惟親家

090 翁母動靜友勝此某諸弊少理未由拜洩引領

091 悲望日夕無捨因使慘愴不次姓名頓首



↓	冬祭	妯娌父母亡及夫亡	067
維年月日孤子名等敢昭告	凶豐無常 親家翁母傾	③	068
于 亡考之靈某等不孝	背 或云尊府君夫人云某郎 攀慕擗		069
罪深不孝罪深不能隨歿	標貫哀楚痛苦奈何		070
玄運遄速奄及冬節攀	答云耶孃年雖居高冀		071
慕慈顏不勝號絕謹以蒸祭	延遐壽 夫豐云不意凶某郎頓逝 追慕		072
惟 尚饗	無反觸目無紀荼毒罪苦		073
	永痛罪苦		074
祥祭	夫亡舅姑夫及父母答		075
維年月朔日孤子名等敢	弔辭 禍出不圖		076
昭告于 亡考之靈某等	凶豐無常 親家翁母傾		077
不孝罪深不能隨歿日月	背 或云尊府君夫人云某郎 攀慕擗		078
流速奄及大祥示人有無	標貫割哀楚痛苦奈何		079
敢過禮制從禮制釋凶就	答云 耶孃年雖居高		080
吉伏惟 尚饗	冀延遐壽 夫豐云不意凶某郎頓逝		081
⑭	追慕無反觸目無紀		082
	荼毒罪苦永痛罪苦		083
遷葬祭	弔舅姑遭父母辭		084
維年月朔日孤子名謹以少牢之	凶豐無常 尊夫君大家		085
奠敢昭告于亡考之靈某	崩背伏惟攀慕擗標		086
等不孝罪逆奄及安厝禮	荼毒貫割痛苦奈何	②	087
制有限不敢觸違玄運遄	答云 罪逆深重不自死		088
流奄經五載龜筮告吉今日	滅攀慕無及觸目崩		089
吉辰謹啓慈顏不勝屠楚	絕酷"罰"罪"苦"		090
伏惟尚饗			091
除服祭	妻父母亡夫弔答辭	⑥	092
維年月朔日孤子某等謹	凶豐無常 丈人 夫母 傾		093
以庶羞之奠敢昭告于亡	背攀慕擗標荼毒		094
⑮	貫割哀"苦"奈"何"答云		095
考之靈某等不孝罪深不能	耶孃違和冀漸膠豫		096
隨歿玄運遄速奄及三周	何圖不蒙靈祐奄邁		097
攀慕恩慈昊天罔極禮制	凶豐追慕無及觸目號		098
有限不敢獨違以明旦吉辰	絕酷"痛"罪"苦"		099
修從禮制號天叩地不勝摧			100
絕伏惟 尚饗			101
父祭子			101
某年月朔日告汝某之靈吾	舅姑亡父母弔答辭		102
↓	↓		



092

但云服前

月日

093

題如吉

094

⑪

妻亡弔丈人母書

096

月日名頓首頓首凶故無恒次娘子疾疹冀其痊

097

復何圖不祐以某月日奄邁凶豐悲慟貫楚

098

不自勝任伏惟聞問悲慟痛"當"奈"何"仲秋漸

099

涼伏惟 丈人丈母尊體動止友福某未由拜洩

100

伏增悲戀謹附白疏慘愴不次姓名頓首

101

題如吉竝無謹封

月日

102

103

104

答書

不意凶衰

105

次娘喪逝悲慟貫割難以爲懷相視偏露倍增

106

傷悼痛苦深晚伏薨蒸敬想清祐辱月日慰

107

但增悲係謹遣還答慘愴不次姓名 月日

108

題如前

109

⑨

外生亡弔姊書

111

月日名言凶故無恒 某乙夭逝聞問悲悼不自勝

112

任伏惟 貫割號楚哀悼奈何季冬極寒伏惟

113

動止友豫未由拜洩伏增悲戀謹奉白疏慘

114

愴不次名再拜

月日

115

題如前

116

答書

117

不意凶衰 某乙夭逝喪貫割痛楚難以爲懷

118

念汝渭陽悲悼何極時寒念佳吉吾友常

119

得月日書倍增號楚遣書慘愴不次次姊告

120

某

月日

題如前

121

122

弔姪書



門凶衰鍾禍及汝念汝早喪	凶豐無常 阿翁傾背攀	103
悲慟傷神龜筮叶從殯用	慕擗標茶毒貫割哀"	104
今日躋酒于地汝當歆饗	苦"奈"何" 答云	105
之禮爲汝設祭汝歆饗	圖凶禍 先舅 ^{先舅} 傾背	106
夫祭婦	攀號無及觸目糜潰酷	107
年月朔日官位姓名以清酌庶	"罰"罪"苦"	108
羞之奠敬祭于某氏次娘子之		109
靈卿移夫事天十有餘歲貞		110
孝頗有侍執無虧彼蒼不祐	男女亡舅姑父母弔 ⑧	111
延禍及之俄歸夜天奄從逝	不意凶衰 某乙夭喪號	112
水將即玄壤龜兆叶從慟哭神	慟貫割悲痛奈何	113
兮降趾	答云 某盛年冀其成立何	114
婦祭夫	圖薄福奄鍾此禍悲"悼"	115
維年月朔日某氏新婦以少牢	痛"苦"	116
之奠敬祭于 故官位次郎之靈		117
兒門族寒微會蒙侍執雖		118
闕如賓之禮冀保同穴之榮	三歲已下弔辭	119
何期凶豐所鍾忽爲今古日月	孩子夭逝去離懷抱悲念奈	120
迅速奄及大祥疾首痛心未	何	121
已人也奠慈幽解明神式昭尚饗		122
祭兄 ⑫	答云	123
維年月朔日名謹以清酌之	某盛年冀其成立何圖	124
奠敢昭告于 次哥之靈與兄	薄福奄鍾此禍悲"悼"痛	125
弟天倫連枝共氣何圖凶豐	"苦"	126
奄即奠祭長辭不勝號楚伏惟		127
尚饗		128
祭姊	三歲已上十五已下弔辭	129
維年月朔日名謹以庶羞之	禍出不圖	130
奠敢昭告于 某姊之靈惟	賢郎盛年殞逝悲痛奈何 ⑪	131
靈與某同氣相依周官已傳不		132
墜先業即適他族謂保終榮	答同前	133
何圖積善無徵奄從玄壤日月	合靈祭	134
遄速忽至今時謹獻庶羞之奠		135
祭男冥	年月朔日吾告某婿某女之靈	136
年月朔日吾告汝名之靈汝	汝等不孝早亡同歸玄壤禮	137
不孝早亡潛噎玄壤靈神墳	制難越二靈合筵善自邕以	138



123

不意凶故 某乙夭喪悲悼傷痛難以爲懷念

124

汝割裂恩慈號慟何極奈"何"時寒念汝無

125

橫未即集洩但多悲念遣書慘愴不次"哥告

126

某氏妹

127

4

答書

128

月日某氏妹次娘言不圖凶衰某乙夭喪貫割號楚痛

129

悼難任伏惟悲念奈何悲痛奈何仲冬已寒伏惟

130

哥姊尊體動止萬福未由拜訴伏增悲戀謹奉白

131

書慘愴不次"娘再拜

(末尾)

01

冥婚書 題如吉法

02

03

某頓首頓首仰與臭味如蘭通家自

04

又承賢女長及載筭淑範夙芳芳金聲早

05

以禮詞亦云請願敬宜謹遣白書不具

06

答冥婚書

07

久闕祇叙延佇成勞積德不弘豐鍾

08

牘既辱來貺敢以敬從願珍重亦云厚謹

匹冥禮視同今汝娉某氏爲	保終始男女某乙等爲汝設祭	139
婚以保榮匹謂汝設祭魂兮	魂兮歆饗	140
歆之	題旒文	141
祭女冥婚	維太歲某辰某月某日具官郡	142
年月朔日吾告汝名之靈汝	縣鄉里姓名府君之神旒徐	143
不孝早亡生無伉儷當就	廣云今時人題旒或多不安年號	144
凶禮尅用今時適與某郎	但安郡而已若妻亡從夫之爵妾	145
以保榮匹好修婦禮謹事	從子之位某夫人之神旒凡家長已	146
他門爲汝設祭汝當尚饗	上或身長等喪埋冢克葬日訖	147
	即于家內廳事及堂居苦前隨	148
	便安旒樹旒于東階樹旒于西階	149
	者表主人有喪旒者明亡人有官	150
	(末尾)	
昔平生之日思展好仇積善無徵苗而不秀		03
振春花未發秋葉已凋賢與不賢眷言增感曹氏謹		04
姓名頓首		05
		06
己女賢子含章挺秀竹頸松貞未展九能先悲百		07
還白書不具姓名頓首頓首		08